佐藤秋雄―羽山太郎を偲ぶ集い プログラム

2020 年 9 月 12 日（土） 14 時～16 時 30 分

東京・韓国 YMCA アジア青少年センター

１・開会の挨拶 14 時～　偲ぶ会実行委員長 杉浦英夫さん

２・献 杯 と 黙 祷

３・個人のご親戚紹介とご挨拶　佐久間　久雄 様、佐久間 康夫 様

４・呼びかけ人の挨拶 15 時 15 分～

５・運動団体からの弔辞

６・閉会の挨拶 16 時 25 分～

二次会会場（祭り）には一階ロビーからご案内します。

年	故・佐藤秋雄＝羽山太郎を巡る主な出来事
1941	10月1日、福島県安達郡戸沢村（現・二本松市）にて生誕。
1957	4月、福島県立安達高等学校針道分校（定時制）に入学。
1961	4月、専修大学２部経済学部に入学、目黒区の(有)武蔵興業所に住み込みで働く。
	10月、2部学生会本部役員に就任。
1962	10月、学生会本部副委員長に就任し、1部、2部就職差別反対、大管法反対の闘いに参加する。
1963	４月、中央区の㈱木村産業に転職、転居。10月、学生会本部委員長に就任。
	その後、自治会活動、夜学連運動を続け、68年まで都内各職場をほぼ毎年転職。
1964	10月、マルクス・レーニン主義者同盟（ブント再建委員会）に加盟。
1965	2月、日韓会談反対闘争、椎名外相訪韓阻止の羽田闘争に参加。
	6月、日韓条約批准阻止闘争に参加し、国会正門前で逮捕される。
1966	ブント南部地区専従として、ブント再建6回大会に参加。
1967	10・8羽田闘争に参加、11・12羽田闘争で現場指揮し、逮捕される。
	12月、ブント南部地区委機関誌『赤軍・第１号』を発行、翌年1月には第2号。
1968	1月、東京地区反戦世話人に就任、4・28集会で逮捕され、10・21防衛庁闘争で事後逮捕。
	秋から80年まで、全国寄せ場を中心に転々とする。
1969	5月、保釈にて出獄、７・６事件で重傷を負う、12月、ブント9回大会で軍事委員に選出される。
1970	10月、ブント南部地区委で『鉄の戦線』創刊。
1973	蜂起派が分裂し、蜂起左派を結成する。
1976	6月、蜂起左派、爆取罰則で一斉逮捕される。
1980	6月、「アイヌ解放研究会」に参加、㈱大地牧場で運転手として働く。
	9月、著作『ＢＵＮＤ・ブント』を西南社から出版、11月に琉球・沖縄へ旅する。
1982	「アイヌ解放研」はじめ、「ブント研究会」「プロ独研究会」「資本論研究会」に参加。
1983	3月、豊島文化社が誕生、「三里塚に緑の大地を！労働者市民学生の会」結成。
	以降、農業農民問題と農民運動に参加する。
1984	3月、毛沢東思想学院訪中団の一員として訪中。
1985	8月、六田孝子と結婚。
1986	共産主義者同盟の「プロレタリア通信」発行を開始し、2017年まで続ける。
1987	6月、沖縄日雇労組を結成、沖縄海邦国体闘争に参加し、沖縄日雇い労働組合運動に連帯する。
1992	3月、「アイヌ民族を国会に」の運動を始める。7月、萱野茂の参院選挙を戦う。
1995	2月、「農民連合・東京」を結成して事務局長に就任し、機関誌『農といのち』を発行。
1998	夏、東ティモール訪問。12月、「ブント結成40年」集会を契機に共産主義者協議会を準備。
1999	『共産主義運動年誌』を創刊し、編集委員となる。
2006	3月、キューバを訪問する。
2011	3月、福島原発反対運動に参加。5月、大腸がんを発症し、12月に手術。
2013	10月、著作「日本農業の復権」（発行：豊島文化社）を出版する。
2015	左右の肺がんを手術。
2016	前立腺がんが発見される。
2019	著作「ブント その経験の一断面」（発行：豊島文化社）を出版する。
2020	著作「アイヌ・琉球・私の解放に向けて」（発行：ＪＣＡ出版）を出版する。5月14日永眠
	2020年、佐藤秋雄自筆年表を基に作成、9.12の偲ぶ集いにて配布

佐藤秋雄―羽山太郎を偲ぶ集い実行委員会宛ての追悼メッセージ（到着順）

三上治（経産省前テントひろば）

佐藤秋雄さんを偲ぶ刻を
誰も佐藤秋雄のことが好きだった。
少年の面影が残る表情のひとつひとつがともいえるだろうか。久しぶりに顔をあわせると、ほっとするというか、なんか自然にうれしくなるのだ。人は何と呼んでいたのだろうか。「アキオ、アキオちゃん」など様々だったのだろうが、人を引き込むような笑顔が忘れられない。
彼が癌を患い、何度も苦しい闘病生活をやってきたことをみんな知っていた。でも会えば、彼はそんな素振はどこには見せず、涼しげな表情だった。「今度はここを取ったのだよ」という彼の語り口というか、振舞いに驚きとともに、救われた思いになった。本当は苦しいことも、泣きたいこともあったのだと思うが、彼の美学というか、対応は爽やかだった、ここには彼の他者への思いがあったのだと思う。
彼と出会ったのは１９６０年の安保闘争の後だった。安保闘争の余燼も残るころだったと思う。記憶は定かではないが、活動する人たちも減り行く運動のなかでだった、と思う。今年は１９６０年の安保闘争から６０年目ということになるが、思えば遠い昔のことだ。僕には遠いという感じはないのだけれど、あれから、僕らは様々なかたちで付き合ってきた。ある時は志を同じくする政治グループの一員として、ある時はそのグループの中での対立するものとして。そして、多くの屈折を経ての闘いの中で顔を合わし、お互いに共感しあうものとして。また、数少ないメンバーの研究会をやるものとして。長い付き合いは僕の人生の重要な要素を構成してきたのだと言える。多くの人が様々の形で彼に出会い、関係を結んできたのだと思う。
彼の死は、唐突というか、突然のようにやってきた。これは僕が彼の病状を知らないうかつさに過ぎないのかもしてない。たとえ、そうであったにしても死は唐突にやってくる。人の死にあうたびにいつも思う、「もう少し話でもしておけばよかった」という悔いもある。僕は今になってでも彼の事を話したい。そんな刻を持ちたい。

重信房子

追悼！佐藤秋雄（羽山太郎）
★「あと二年俺は死なない迎えに行く」と伝えし君の訃報届きぬ
佐藤秋雄さんの５月２７日の逝去を知らされて、呆然としています・・
先日の上原敦夫さんからの手紙では・・・電話で話し「はっきりした元気そうな声でしたが、１０年前の大腸ガンに始まり、肝臓、左右の肺、前立腺と、次々ガンの手術をして『もう切るところがない。どうやって生きているか不思議だ』と医師にも言われたそうです。
『おれは死なないよ』と笑っていましたが、実は大腸ガンが再発して、もう手術は出来ないそうです」との事でした。そして、一緒に活動していた私たちのことも懐かしそうに話し、「あと２年。俺は死なないから迎えに行ける」と断言していたそうです。

ここまで書いて思わず落涙。佐藤秋雄先輩、生きて出会いたかった・・・と感情が激しくて・・。
「ブントの労働戦線」といったら、佐藤さんが東京の代表で、反戦青年委員会の世話人として、良く知られていました。
明治大学の学生会館にいつも訪れては、昼間部、夜間部の仲間と明るく屈託ない大声で、闘いの意義を語り、ブントを愛し、情熱一杯だった佐藤秋雄さん。
「俺は福島の呑百姓だ！」「労働者の魂をブントはもっと知るべきだ！「反戦青年委員会世話人なんて、パクられ要員だよ」豪快に笑いながら、あの６８年、６９年何度でも逮捕されながら意気軒楊だった先輩を忘れることが出来ません。
遺作となった『ブント－その経験の一断面』で知ったのですが、福島から１９歳で上京し、住み込みで旋盤工見習いとして働き「一旗揚げる起業の夢」は、１９６２年に専修大学二部の自治会活動でつぶれ、夜学生の切実な願い「二部差別反対」や「通勤、通学への学生割引」などを求め、明治大学の井波尚義先輩たちと共に「夜学連」再建を目指し、日韓会談反対などを闘っていたと知り、

新入生の私がその片隅で一緒にデモに参加していたのを知りました。
そして、佐藤先輩は、労働者仲間の鈴木雄作が明治大学に居ると引き合わせてくれて、初期現代思想研究会（現思研）メンバーの一人として、一緒に鈴木雄作と私がブントの加盟書を書いたのは６７年春のことです。
そのころ専修大学の佐藤秋雄さん、中井正美さん、岩崎司郎さんら私たちは社学同仲間で、中央大学の久保井拓三さんや前田さんらと、いつも一緒に行動していたのを思い返しています。
佐藤さんの本では、「１９８０年アイヌと出会って大きくその思想（行動様式）を変えた」と述べています。ブント流の理論ではなく、生きた人民、抑圧された人民、とくに琉球・沖縄や人民の歴史に依拠する闘い方に目覚め、現在まで闘い続けていることを遺作で伝えています。
「足のウラ」で学び、活動する一貫した姿勢で闘い続けた佐藤先輩。
「７・６事件」で、後にブント赤軍派となる塩見孝也さんらから、さらぎ議長共々リンチされながら、その怒りを闘いの力として、ブント赤軍派の誤りをしっかりと遺作にも記していて、又ブントマルクス主義戦線派との暴力を含めて、ブント赤軍派の塩見孝也さんらの事を、遅ればせに知りました。
ブント赤軍派の一員として謝罪しましたが、私をブント仲間としていつも暖かく励まして下さり、「オリーブの樹」にも寄稿して下さった佐藤先輩、再会の挨拶も果たせず、永別を迎えたことが無念でなりません。
明るく楽天的な革命精神、情熱の革命家、佐藤秋雄先輩に最後の敬礼を送り追悼します。合掌
（2020 年 6 月 5 日）
★「あと二年俺は死なない迎えに行く」と伝えし君の訃報届きぬ
★「いろんな話パレスチナの話聴きたいな」訃報と共に君の声届く

渡邊義明

佐藤秋雄＝羽山太郎さんを偲ぶ
1969 年 6 月 1 日ブントを脱盟して 1970 年 1 月に京大労研を結成し 1972 年 4 月上京して 1973 年 9 月労働研究会・三里塚闘争を支援する労働者の会を結成した小生が、佐藤秋雄＝羽山太郎さんと初めてお会いしたのは 1980 年代です。
1990 年代には、1998 年の共産主義者協議会の前身のブント協議会（旭凡太郎・八木健彦・羽山太郎・小生で構成）で 2 年ほど討論しました。
レーニンの残した民族自決権支持・帝国主義国プロレタリアートのプロレタリア革命と植民地民族解放闘争の結合、労働者貧農同盟を実践することから、ブント総括をすることが共通点でした。
アイヌ解放研究会参加（アイヌ解放同盟・ウタリ会との連帯）、沖縄日雇い労働組合運動・沖縄青年同盟との共闘・沖縄一坪反戦地主会支援、NPO ティモール日本文化センター結成（東ティモール経済建設支援―有機農業・バイオガスプロジェクト参加・東ティモール訪問）等。
労働者の反差別・反公害住民運動への組織化、日本の侵略反革命前線基地三里塚空港建設反対（三里塚に緑の大地を！労働者市民学生の会結成、1983 三里塚再共有運動・1991 都はるみ三里塚星空コンサート参加）、農民連合東京等。
逝去まで、多くを協同しました、謹んで哀悼の意を表します。

乾喜美子　（経産省前テントひろば）

佐藤秋雄さんのこと
先月、突然佐藤秋雄さんが亡くなられたと聞いて本当に驚いた。
というのは亡くなる少し前5月15日の金曜日にテントに来てみんなと楽しそうに歓談していたのを見ていたからだ。彼が何度か癌を克服してきた話は以前から聞いてはいたのだけれど・・・・まさかこんなに早く旅立ってしまうとは思っても見なかった。私が彼と出会ったのは確か 2008 年、長岩さんが安保条約無効の本人訴訟を起こしてそれを支援しているときのことだった。
もっと多くの場所で訴訟を起こすべきとの呼びかけを受けて彼も神奈川での訴訟を起こした時だった。不本意ながら裁判所法第 3 条「訴えの利益がない」との裁定で却下されましたが、本人訴訟で

の闘いは勇気ある行動だったと思います。その後は辺野古のデモなどで顔を会わす位でしかなかったが、原発事故のあとテントで再びお会いすることが多くなった。福島出身とのことで反原発の意識が強かったのではないだろうか。テントが撤去された後の経産省前に時々ひょこっと現れて今日はデートだと嬉しそうに話していた。何でも昔の闘争の話などに興味を持っている若い女性がいてお茶を飲みながら色々教えていたようだ。
数か月前、遺言のつもりで書いたという『ブント　その経験の一断面』という本を送って頂いた。題名からして難しそうだったので棚に飾っておいたままだったのだが、彼の訃報の後、取り出しめくってみて彼の労働者としての運動に対する深い思いを知り、もっとまじめに彼の話しを聞いておけば良かったと悔やまれる。この本の中で労働現場と運動に共通して大事なことは何よりチームワーク、人が人を信頼し合うことだと言っている。何より彼はアイヌ・沖縄・三里塚などの人々に心を注ぎ続けてきた。あとがきに「私はこれまでもそうであったが、これからもアイヌ・沖縄・山谷・釜ヶ崎の労働者や福島の女たちに寄り添って生きていく」とあり、あと２年は生きたいと、癌と闘う決心をしていたのにさぞかし心残りだったでしょう。私は全共闘のことも共産主義についてもまるで無知だが、もう一度彼の本をじっくり読んでテントの闘いについても考えてみたい。

高原浩之

佐藤秋雄さんを追悼する
秋雄さんはブンドきっての労働者革命家であった。最初は「煙ったい」存在であった。
・７/６事件を謝罪
　2017 年、ある人の仲介で、会って謝罪した。それまで長く、顔を合わせることはとてもできなかったが、その後は、大変親切にしてもらった。深く感謝しています。
後悔しても遅いが、７・６事件が連合赤軍事件の要因となった。「リンチ」は「内ゲバ」をさらに超えた悪い「体質」である。赤軍派の指導部は、党内闘争で支持が広がらず孤立し、内部の動揺を抑え指導権を維持するために「内ゲバ」と「リンチ」を実行した。しかし、型通りの自己批判でその根本を隠蔽した。連合赤軍事件では、革命戦争方針が破綻する中、指導者が組織を支配し指導的地位を守ろうと悪無限的に「総括」=「リンチ」を続けた。
「内ゲバ」「リンチ」と「粛清」は新左翼運動と国際共産主義運動を蝕み続けてきた(ソ連の「粛清」は官僚制国家資本主義の支配)。必ず清算しなくてはならない。それには、根源まで掘り下げた総括と、被害者に対する加害者の具体的な謝罪が必要である。
・「偉大な努力」を体現
　2018 年、ある契機から、赤軍派をもっと深く総括しようという機運が起き、その成果で、約 20 名が共同して『追想にあらず』を出版した。秋雄さんも参加してくれた。
秋雄さんは、三里塚闘争や沖縄闘争の経験の上に、アイヌ･琉球の民族問題、および農業問題(故郷の東北は農民運動の中心地)に取り組んできた。その中でブンドの総括と小ブルジョア急進主義の清算を実行してきた。
そこから教えられ、確信して『追想にあらず』に書いた。「今日の人民闘争は、その具体的な課題の一つ一つに、この半世紀の間の偉大な努力が存在していると思う。新左翼(党派と元党派に属した活動家と新世代の活動家の総体)が、良い『体質』=実力闘争･自己決定権を堅持し、悪い『体質』=小ブルジョア急進主義を清算し、人民大衆と結合した。民族･女性･部落など差別の問題や労働者階級『下層』の問題が大きかったと思う。」
・できなかった議論
『アイヌ･琉球』と『日本農業の復権』を贈呈され、感想を送ると約束した。1.民族自決権、2.先住民族の権利、3.社会的文化的な民族的権利。1.有機的･循環型農業、2.農業と工業を再編し自然と共生する、3.社会主義の労農同盟。これらの提起に賛同する。
しかし、ソ連と中国における、大民族(ロシアと漢)の支配や農民の収奪(資本の原始蓄積)を理由に、マルクス･レーニン主義の全否定はできない。やはり、資本主義は社会発展の必然(官僚制国家資本主義も)、プロレタリア階級の階級闘争が社会主義革命の原動力、この論点は正しい。「帝国主義から社会主義への過渡期」という上部構造論だけ(赤軍派の主観主義の原因)でなく、資本主義の帝国主義段階が継続した土台を分析し、内在する矛盾を把握するならば、もっと広く深い社会主義･共産主義が打ち立てられる。

こう議論したいと書いているうちに訃報を受け取った。しかし、最後まで書いて、やむなく編集者に送った。追悼の気持ちです。読み流しておいて下さい。（おわり）

高橋　道郎　（特定非営利活動法人　東ティモール日本文化センター理事長）

佐藤秋雄さんを追悼する
貴兄とは同じ政治組織の仲間として知り合い、ともに社会変革のために努力をしてきました。
最近は、仙台で継続されている資本論研究会と貴兄が東京で組織された東京の資本論研究会の情報交換や仙台で組織されている吉野作蔵の生涯と業績を研究する勉強会の情報交換などで、交流を継続してきました
また私が仲間とともに継続してきた東ティモールの民族独立運動の支援に積極的にご協力賜り、一緒に東ティモールを訪問したこともあります
佐藤秋雄さんは農業問題やアイヌ・沖縄の問題にも熱心にとり組まれ、私は佐藤さんと問題意識を共有しながら、これらの問題でも交流を継続してきました
佐藤さんは様々な健康上の問題を克服されながら大切な諸課題に真摯に取り組まれたかけがえのない社会変革運動の先達であり、指導者でした
この間のご指導ご厚誼に深謝し、心からご冥福を心からご祈念申し上げます。2020 年 8 月 26 日

柳川 秀夫　（三里塚芝山連合空港反対同盟）

佐藤秋雄さん追悼
佐藤さんが亡くなったこと、偲ぶ会の案内で知りました。思いもしない惜別となってしまい、残念なことです。
佐藤さんが三里塚に関わってこられもう何十年になるだろうか、感謝に尽きないことです。
特にもう 20 年にもなる成田空港問題の解決をめざしてのシンポジウム、敵との話合いに反対意見が多い状況の下、そのシンポジウムの場には必ず佐藤さんが来てくれていた。闘いは人かずも大事なことで、少ない参戦の中、彼の参加は心強いことでした。
当時反対同盟は二期予定地、天神峰・東峰等への強制代執行を如何に阻止するのかが最大の課題であり、敵とのテーブル上の対決も重要なことでした。おかげで、強引に三里塚に決定し強権をもって着工を進めた国の非を認め謝罪し、その証しとして、事業認定を取り下げました。結果として、強制代執行の法的根拠が無くなりました。評価は様々だろうけど、百姓が農地から引き離されなくなって、成果だと思います。
空港問題の本質的解決には遠いものがある現在ですが、佐藤さん達のように心の支えがあっての闘いが三里塚闘争の所以です。その魂は共にあります。ありがとうございました。

田中正治

佐藤秋雄さん追悼

ガンに苦しめられていた長い年月時々会うたびに見せる君の強靭な精神力に圧倒され、畏怖の念さえ抱いてきた。その精神力はどこから来たのだろう。僕は君の生い立ちや生活を詳しく知らない。だが時折会ったり共に活動した断片的記憶をつなぎ合わせると、一つの源に行きつく。しいたげられた人々への温かい熱い共感と、しいたげし者への激しい怒りだ。アイヌの人々に対する、沖縄の人々に対する、東北の農民に対する慈愛だったのではないか。もう今はどこでだったか思い出すこともできないが、悲しみ苦しむ人の現場で、静かに涙していた君の姿が浮かんでくる。

３年ほど前だったか、君は「明治維新は革命などではなく単なるクー・デターで、「吉田松陰は、アジアへの帝国主義的侵略の下絵を描いた人物だ」といった話を激しい口調で話した。明治維新の歴史観の逆転を果たしたかったのだね。薩長軍に敗れた敗者は野ざらしにされた東北列藩同盟。明治

維新政府によって冷遇され、3・１１原発事故を見てもわかるように現在もなお続く冷遇。しいたげられ苦しみ屈辱をうけ続ける人々へのまなざしは深く、それが君を革命家の道に歩ませたのだと信じる。

荘 茂登彦

野武士、佐藤秋雄さんを偲んで

専修大学は、戦後に新制大学となり東京や関西の伝統的な私学が、総合大学へと大きく発展して行く中で強固なバックボーンももたず、財政基盤も脆弱で時勢に乗り遅れます。
そのためそれを挽回すべく大学は、創立 80 周年事業「総合 5 カ年計画」を打ち出し、ＯＢで自民党の重鎮川島正次郎氏を「総長」に迎え、その影響力に期待し理事会、教授会の全権を「総長」に委任します。それにともないこの事業を推進すべく経営側、教授側、学生の三位一体の専制体制が整備されます。
1961 年のことです。時を同じくして佐藤秋雄さんが専修大学に入学しⅡ部学生自治会委員長につきます。専修大学は、立場を異にする相容れない二人の指導者を学内に抱え込んだのです。しかも一人は野武士のような福島県出身の厄介な革命家です。秋雄さん達は、早速大学側の方針に異議を申し立てます。「総長制導入反対、専修大の民主化要求」です。この訴えを表明し行動をおこすことは直ちに専制体制の一翼を担う大学の新撰組を自認する応援団と、体育連合会の学生軍団の鉄拳の前に身をさらすことを意味します。それでも秋雄さん達は怯みません。
64 年に専修大に入学した私は、二年生の初め頃まで昼間部自治会を制していたこの体制側雄弁会の幹部候補生（教養部弁論大会優勝者）として、この厄介な革命家と微々たる数のブント細胞、中井正美さんや前澤昇さんのまるでパルチザンのような地下抵抗運動を眺めていました。
一方激しさをましつつあったベトナム戦争が世界的規模での反戦闘争を顕在化させつつありました。これに触発された市民と学生が「ベ平連」を生み、65 年社会党青少年局が呼び掛けた「反戦青年委員会」に多くの青年労働者が呼応しました。私もこの頃から参戦しますが、まず三派で都学連を再建し日韓闘争、原潜横須賀闘争をへて三派全学連を再建しました。ベトナム反戦闘争の盛り上がりが、早稲田、明治、日大を始めとする各大学の学費、学館闘争を巻き込んで膨大な数のラディカルな学生運動に発展し三派全学連がその先頭に立ち闘争をリードします。そして各派は指導権を争いながらあの１０・８羽田闘争に向かうことになります。
この頃は秋雄さんと私は常に闘争現場にいましたが、秋雄さんは野武士のような風貌で体勢低くまるで農耕馬の如く大きく見開いたあのぎょろ目で機動隊の壁めがけて突進します。輝く秋雄さんの真骨頂です。
67 年１０・８に先立って１０・６「佐藤訪ベトナム抗議集会」が社会党、共産党共催により日比谷野音で開かれました。これに参加した全学連のデモ隊の指揮者として私は逮捕され丸の内警察署に拘留されていました。砂川現地闘争で同じく指揮者として逮捕されて以来二度目のことでした。ですから私はあの歴史的転換点となった１０・８羽田闘争は未経験で知りません。この格差は私にとっては大変おおきなものとなりました。
そんなわけで 68 年 3 月に専修大学を卒業した私は、運動から身を退き墳墓の地大泉に戻り家業に一意専念することになりました。
私が秋雄さんや皆さんと行動を共にしたのは、ここまでで 4 年にも満たない極短期間ですが濃密でした。ここからの疾風怒濤の時代や 1968 革命と呼ばれる激動期の除幕式に私は立ち会ったにすぎません。あの時代から半世紀以上の時が流れ専修大学も、校友会（ＯＢ会）共に当時の私の友人の多くが残り今年で創立 140 周年を迎えました。秋雄さんの足跡も又この歴史の中の確かな一ページです。
私は今、友人達の要請もあり大学の方は評議委員、校友会は顧問で代議員、又趣味がゴルフのため体育会ゴルフ部の基金顧問です。すっかり元の鞘に納まっています。
私の人生を豊かなものにしてくれたのは、秋雄さん始め他ならぬこの両陣営の友人達です。感謝しています。

追悼・羽山太郎

北山　峻

五月二十四日、六十年安保闘争以来の闘士・羽山太郎が逝去しました。享年七十八歳。羽山は、この十年来、二度の癌の手術を乗り越えて活動してきましたが、今回三度目の肺癌とその全身への転移によって遂に斃れたのです。

真珠湾攻撃が行われた一九四一年の秋、福島の農家に生まれた羽山は、幼いころから農作業に従事し、農業高校を卒業した後、東京で働きながら専修大学の夜間部で学び始めましたが、すぐさま六十年安保闘争の高揚に巻き込まれその運動に参画したのでした。安保闘争で果敢に戦った「ゼンガクレン」とその中核組織であった共産主義者同盟（ブント）に参加した羽山は、その後六十年、数々の闘争の果てにその志半ばにして斃れたのです。

羽山太郎が、社共に代表される既成の左翼だけでなく、数々の「新左翼」の凡百の活動家たちとも決定的に異なっている特徴的な点を数点あげると、第一に、明治時代の幸徳秋水や堺利彦などの「平民新聞」以来、「主義者」といえば青白いインテリで、体は虚弱だが頭でっかちの観念的な空論家を連想しがちな中で、羽山太郎はそれとは正反対で、少年時代から福島の安達ケ原で馬を乗り回し、大家族の中で重労働の農作業を担って鍛えられた屈強な肉体派だったということです。

それ故に、羽山は、肉体労働によって世界の富を生産する農民や漁民や下層の労働者と何の違和感もなく交流できたばかりか、言行一致で実践第一の運動家でした。

明治以来の天皇制社会体制と同様、東大や京大などの学歴だけが自慢のインテリが指導者として幅を利かした左翼の指導者の中でも、羽山は「若いこと、無名であること、貧しいこと」という、中国土着の共産主義者毛沢東が述べた理想の革命家像を彷彿とさせる異色の人物でした。

第二に、羽山太郎は、コロンブスの「新大陸発見」以降、英・仏・独・蘭・西・露などの西欧列強が、南北アメリカ大陸をはじめ、アフリカ大陸、インド亜大陸や東南アジア、中国大陸、中東諸国やオーストラリア大陸に至る世界各地を強盗的に侵略し、世界中の多くの民族を蹂躙し、大収奪していった過程を、かつてマルクスやエンゲルスが、「文明的・進歩的な資本主義が野蛮・半未開の遅れた世界を文明化していく過程である」と、侵略者の側に立って発言していたのに対して、これに真っ向から反対したことです。同時に彼は、この流れの現代版であるところの、支配的な強盗民族が多くの弱小民族を食い物にし続けている世界に怒りを燃やして、常に被抑圧民族や被抑圧人種の解放闘争に思いをはせていたのです。そして、そこから日本の少数民族であるアイヌ民族と琉球民族の解放闘争に対する献身的な取り組みを行ったのでした。この戦いの中で羽山は、逆に自分自身の中にある支配民族特有の邪悪な優越感を一掃し、自らを純化し解放してきたと述べています。

二十一世紀の日本の革命運動を語るとき、羽山が指摘したように、このアイヌ民族や琉球民族の解放闘争に正面から取り組まない者は、もはや革命家とは言えないでしょう。

第三に、羽山太郎が人生を通じて一貫して強調してきた革命の重要な論点は、万人の生存のための食糧を生産する農民や漁民こそが人類を根底から支えている人々であり、農民階級は、さまざまな社会的危機の際には農民戦争によって国家社会を根底から覆し、歴史を前進させてきた階級であったという歴史的事実、そして二十世紀のロシア革命や中国革命なども明らかに農民革命なのですが、今後の世界革命の過程

でも農民は革命の一大勢力となるという確信です。

マルクスやエンゲルスが「共産党宣言」の中で、資本主義の進展とともに日々没落する運命にある農民階級は、資本主義の進展に反対し歴史を逆転させようとする反動的階級であるとしていることに対して、羽山太郎はこれを全くの謬論であるとして真っ向から反対してきたのでした。

第四に、さらに羽山の偉いところは、六十年代から長年にわたって対立と分裂を繰り返した新左翼のセクト主義の真っただ中にいながら、反内ゲバ主義を貫いて、やられても一度もやり返すことなく粘り強く闘争を堅持してきたことでしょう。

これらのことは、羽山が、死の直前に出版した「日本農業の復権」（二〇一三年・豊島文化社刊）、「ブント―その経験の一断面」（二〇一九年・JCR出版刊）、「アイヌ・琉球」（二〇二〇年・JCR出版刊）の三冊に詳しく載っていますので、ぜひご覧ください。

羽山太郎は、二十世紀後半の日本に現れた稀有な、独創的な共産主義者だったのでしょう。

彼の純朴で光り輝くダイヤモンドのような魂は、今も天空高くから世界を見守っているに違いありません。

「秋雄さん、そう遠くないうちに、またコーヒーでも飲みながら談笑しましょう。」　合掌

二〇二〇年六月四日